

# 第 13 回当事者研究全国交流集会大阪大会

NPO 法人 セルフサポートセンター浦河  
〒057-0024 北海道浦河郡浦河町築地 3-5-21

## 助成事業の概要

第 13 回当事者研究全国交流集会 大阪大会は 2016 年 10 月 9 日（日）の 10 時～17 時に大阪大学豊中キャンパスにおいて開催され、全国から約 500 人が参加しました。当大会では、分科会方式での一般演題発表（50 題程度）及びポスターセッション（20 題程度）、ワークショップなどを行うと共に、当事者研究の研究や当事者研究の可能性などについて、当事者や支援者、学識経験者などによる全体講演やシンポジウムを開催しました。一般演題発表やポスターセッションにおいては、精神障碍の当事者や家族、支援者などがそれぞれ研究してきた当事者研究を、パワーポイントなどを用いた口頭発表（各組発表 7 分、質疑応答 3 分）やポスターにて発表しました。一般演題発表に際しては、あらかじめ研究発表者の募集を行い、提出された当事者研究の要旨（苦勞のプロフィール、研究の動機、目的、方法、経過と内容、考察、研究を通して明らかになったこと）から発表者の選考を行いました。また、大会後の夜には有志によって懇親会が開催され、親睦を深めました。

## 事業の成果

当事者研究全国交流集会大阪大会では、当事者研究の一般演題発表を通して発表者の苦勞に対するその人特有の視点からのユニークな自助のあり方を学び、参加者と共有し、発表者の自助に参加者も参加するという自分自身で共にという当事者

研究の理念が存分に発揮された。当事者による研究発表は発表者自身に自信や誇りなどをもたらすのみならず、参加している聴衆にも同様にエンパワメントをもたらし、日常生活への自信へとつながるものとなりました。

またグループ形式での当事者研究のライブ実践を行うことで、参加者は当事者研究とピア・サポータティブな在りようを実際に体験できる。その体験は、それぞれが暮らしている地域で当事者研究を実践していくことに活かしてゆけるものと期待できました。

さらに当事者研究に関する学術的な研究に学ぶことで、各々の当事者研究についての学びを深めることができました。ただ、今後の大会運営には実行委員等から改善点、さらに良くする点を述べられています。それは、当事者研究の発表があまりにも多すぎて、消化不良だったという意見があります。しかしながら、発表を募集したところ、あまりにも多くの応募があり、絞りきれなかったという実行委員会の苦渋の判断がありました。また、向谷地生良氏、村上靖彦氏、白石正明氏のセッションと分科会の時間が重なり、両方とも関心があった参加者からはどちらかを見ることのできないのは残念という声もありました。当事者研究という魅力的な媒体を考えると二日間の運営も検討しなければならないのかもしれませんが、しかしながら、大会実行委員会がほぼボランティアで関わっていることから、大会を 1 日間のみに限定しないと運営が難しくなるのが現実でした。また、懇親会の値段が高すぎて参加できないという声もありました。これも、大阪大学生協様のご

最低限の値段で、最高の料理と飲み物を準備していただき、これ以上は削減できないという現実がありました。そのようなことは、今後の大会運営に取り入れていきたいとおもいます。

当事者研究はセルフ・ヘルプかつピア・サポート的な、他に類を見ないエンパワメント・アプローチであり、当事者研究全国交流集会などを通して全国に普及し実践されてきています。そして全国大会は東京や福島県でも開催されています。しかし、北海道浦河町や東京などを拠点としてきたことから、西日本の当事者や支援者には、当事者研究の持つ可能性が十分に知られているとは言えない状況にありました。今回、当事者研究全国交流集会を大阪で開催することによって、西日本からも多数の参加者がありました。

今回、日本社会福祉弘済会様から頂いた貴重な助成による成果は、本大会のみならず、2017年7月28日開催予定の全国大会である第14回当事者研究全国交流集会浦河大会と10月8日（日）第1回当事者研究全国交流集会関西大会に引き継がれています。

## 成果の広報、公表

当事者研究全国交流集会大阪大会の開催の結果、関西でも定期的に当事者研究大会を開催しようという機運が盛り上がり、2017年10月8日（日）に大阪大学豊中キャンパスにおいて、当事者研究全国交流集会関西大会が開催される予定で準備が進められています。2年2月19日（日）阪本病院なかまの家で開催された大阪大会及び関西大会の実行委員会には、約30名が参加し、その半数が、過去の全国大会大阪大会の実行委員会に参加したことがない、初めての参加者となりました。弱さの情報公開を元に大阪大会運営、発表が進められ、その雰囲気を経験した方々が自発的に参加する実行委員会となりつつあります。大阪

大会の実行委員会の一人は時間通りに始まらない、何も決まらないミーティングだが、なぜか大会運営はできている本当に不思議な大会だったと感想を語っています。

自分自身で共に研究を進め、仲間と共に自分自身を助けるセルフヘルプを大切に当事者研究の理念と実際の活動を広めていくことが、精神及び発達障害等障害者の支援及び支援者自らを助けしていくことにつながり、障害者支援のひとつのあり方を提示していくことができると思われます。

## 今後の展開

当事者研究は、フィンランド発のオープンダイアログとの類似性が指摘されています。オープンダイアログも当事者研究もそれぞれの国の田舎といわれる地方で生まれました。当事者研究は、薬物療法を主体とする治療法が限界を見せている精神医療において、オープンダイアログ同様に今後日本の精神医療のスタンダードになると思われれます。実際に、日本の5つの精神科病院で統合失調症及び知的障害も重複している退院困難という判断をされている患者さんに、当事者研究を実施し、退院する人が次々と起こされている現状があります。また、精神科分野のみならず、普遍的な人間関係や企業のあり方さえも変えていく力があるのではないかと思われます。